

# 日本語の出来事を表す「ある」構文の分析

鄧 超 群

## 要 旨

日本語の存在表現「ある」構文は、出来事を表すことができる。本稿はそれを「出来事文」と称し、存在から出来事への意味生起のメカニズムを考察し、次の結論を導き出した。①「が」格名詞の意味情報によって出来事文の意味特性が決定される。②出来事文には過程用法と活動用法の二種類あり、過程用法は起点格、着点格、方向格、対象格のいずれか或いはセットで選択されるのに対して、活動用法は場所格「で」と共起するのが普通である。③出来事文の意味生起のメカニズムとして、「が」格名詞の目的クオリアが肝心であり、また時間的修飾語の意味情報が「が」格名詞の目的クオリアを取り立てることによって、「ある」構文は静的な存在状態から動的な出来事の意味が生起すると考えられる。

【キーワード：ある／出来事／モノ名詞／デキゴト名詞／クオリア構造】

## 1. はじめに

日本語の存在表現「ある」構文は、1) のように、存在を表すほか、「地震がある」「電話がある」のように、出来事を表すことができる。本稿では、1 a) を「存在文」、1 b) を「出来事文」と称する。

- 1) a. そこに {本／パソコン／希望} がある。[存在]
- b. そこで {会議／試合／練習} がある。 [出来事]

影山 (2011) では、本来状態の意味を表す「ある」に出来事の意味が生起する理由として、主語がデキゴト名詞<sup>1</sup>であるからと説明されている。また、「ある」構文において、「～でデキゴト名詞が」と「～にモノ名詞が」の棲み分けがかなり明確にされていて、その二つの組み合わせを入れ替えると、非文法的な文になると述べている。

- 2) a. \*そこで {鉛筆／ジュース／夢} がある。[モノ]
- b. \*そこに {事故／運動会／会議} がある。[デキゴト] (影山2011: 41)

影山 (2011) の説明によると、「が」格名詞がデキゴト名詞なら、「ある」構文は出来事の発生を表し、「が」格名詞がモノ名詞なら、「ある」構文はモノの存在を表すことになる。しかし一方で、小野(2005) は同じ名詞「電話」が、「ある」構文に用いられると、違う解釈が出てくる可能性を示している。

3) a. 机の上にはカレンダーと電話があった。

b. 彼女から電話があった。

(小野2005: 68)

同じ名詞「電話」を用いながら、3 a) は存在文で、3 b) は出来事文になる。それは「電話」に名詞とサ変動詞の語幹の二つの品詞があり、モノ名詞とデキゴト名詞の両方に解釈されることができるからである。しかし、「学校」「会社」のように、完全にモノ名詞の特性しか持たないものにしても、「ある」構文に用いられると、違う解釈が出てくる。

4) a. トンネル手前に学校があり、ここから左へ折れて車道を東に進む。(『スキーツアー』) →  
[存在]

b. 身体はまだ起きているのに、明日はまた学校があるからとベッドに入ることを強いられる。

(『ツルツルぐにゃぐにゃ世代の病理学』) → [出来事]

即ち、「が」格名詞がモノ名詞であるにもかかわらず、「ある」構文は出来事を表すことができる。それはなぜであろうか。本稿はこの問題を究明するために、次の三つの研究課題を設定して考察を進めたい。①出来事文に許容される名詞はどんな意味的な特徴を持っているか。②出来事文はどのような処格を選択するか。③出来事の意味生起のメカニズムは何であろうか。

本稿の構成は次の通りである。第2節では「ある」構文に関する先行研究を概観し、問題点を整理する。第3、第4節ではそれぞれ「が」格名詞の意味情報と出来事文の処格選択を考察した上で、第5節は出来事文の意味生起のメカニズムを探る。最後の第6節では本稿のまとめと今後の課題を示す。

## 2. 先行研究及び問題点

日本語の「ある」構文について、今までの研究は主に存在文と所有文の違い(柴谷1978、岸本2003: 2005、金水2006、西山2004: 2013など)に注目され、議論されてきた。一方、「体育館で入学式がある」のような出来事を表すものについては、「ある」構文の意味用法としてあまり論じられていないが、格助詞「に」と「で」の棲み分け(中右1994: 1998、定延2004)や、固体名詞(モノ名詞)と事象名詞(デキゴト名詞)の区別(小野2005、影山2011)の議論にまれに見られた。これらの先行研究をまとめると、次のような共通点が見られる。

I. 「に」と「で」の間には体系的な役割分担がある

「に」は物、人の存在場所を表しているのに対して、「で」は活動、出来事の発生場所を表している。

5) a. 体育館に机がある。

b. 体育館で入学式がある。

(定延2004: 183)

5 a) は、モノ名詞「机」の存在場所は「体育館」であることを表しているが、5 b) の「体育館で入学式がある」は、デキゴト名詞「入学式」の行われる場所が「体育館」であることを指す。同じような議論は中右 (1994:1998)、定延 (2004)、影山 (2011) などにも見られるが、中右 (1994:1998) は「固体の位置」と「状況の位置」という表現を使っているのに対して、定延 (2004) は「モノの存在場所」「デキゴトの存在場所」、影山 (2011) は「モノの存在場所」「デキゴトの発生場所」を使用している。

## II. 「が」格名詞の意味によって場所格の選択ができる

6) a. 天安門広場 [に／\*で] 自由の女神像があった。

b. 天安門広場 [で／\*に] 大規模な騒乱があった。 (中右1998: 9)

6 a) は、「自由の女神像」が固体名詞なので、場所格「に」が選択され、「で」は選択不可であるが、6 b) は、「大規模な騒乱」が事象名詞なので、場所格「で」が選択され、「に」は選択不可になる。つまり、「が」格名詞の意味区別に対応して、場所格表示も異なる形式によって明確に表し分けられている。「が」格名詞の意味タイプについては、中右 (1998) は「固体指示」と「出来事指示」、定延 (2004) は「モノらしさ」と「デキゴトらしさ」、影山 (2011) は「モノ名詞」と「デキゴト名詞」など、術語が違っているように見えるが、言っていることは同じだと考えられる。

## III. 「が」格名詞の意味情報は動詞の意味的性質に影響を与えている

小野 (2005) は「電話がある」という例を挙げ、名詞の持つ多義性が、動詞の意味解釈と密接に関わっていることを示した。次の7) は3) の再掲である。

7) a. 机の上にはカレンダーと電話があった。

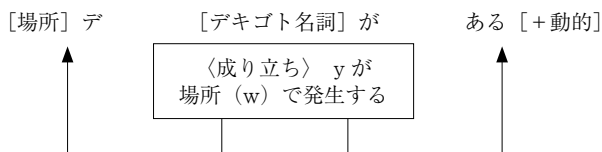
b. 彼女から電話があった。 (小野2005: 68)

「電話」という名詞は〈機器〉と〈通話〉の二つの意味を持つ多義語であると考えられる。7 a) は固体の存在位置を表す「に」格との共起から、「電話」のクオリア構造<sup>2</sup>は形式クオリア、つまり「機器」の意味が選択され、この場合の「電話がある」文は名詞と動詞の意味の共合成で「存在」を意味することとなる。それに対して7 b) は起点格「から」との共起で、「電話」のクオリア構造は目的クオリア、つまり「通話」の意味が選択され、この場合の「電話がある」文は名詞と動詞の意味の共合成で、「デキゴトの発生」(過程)の意味になる。

名詞の意味情報が動詞の意味的性質に影響しているという考えは、影山 (2011) にも見られた。影山 (2011) ではデキゴト名詞のクオリア構造を、ある事態の発生・出現を「成り立ち」<sup>3</sup>の部分に記載しており、動詞「ある」は、名詞のクオリア構造からこの「成り立ち」の意味を引き継ぎ、

動的な動詞としての意味を担うことになる」と述べている。

8) デキゴト名詞のクオリア構造から存在文への情報提供 (影山2011: 43)



8) は「が」格デキゴト名詞のクオリア構造に記載される情報 (y が場所 w で発生する) が、動詞の意味性質 (静的な存在状態→動的な事象発生) のみならず、場所格表示 (デ格) まで影響を与えていることを示した。

上記の先行研究から、「が」格名詞の意味情報が文を組み立てる際に有効に活用されていることが分かった。「が」格名詞がモノ名詞なら、場所格に「に」格が要求され、「ある」構文は存在文になる。一方、「が」格名詞がデキゴト名詞であれば、場所格に「で」格が要求され、「ある」構文は出来事文になる。しかし、実際の用例を見ると、そう簡単に分けることができないようである。第1節でも述べたように、「学校がある」「会社がある」などのように、名詞の意味タイプに関係せず、「存在」と「出来事」の両方の解釈が出てくる場合は、名詞の意味情報がどのように捉えられるのか。また、出来事文において、どんな処格選択をされるのか、出来事の意味生起のメカニズムはどのようなになっているかといった問題はまだ未解明のようである。

したがって、本稿は先行研究を踏まえ、コーパスより抽出された実際の用例<sup>4</sup>に基づき、「が」格名詞の意味情報と出来事文との関係、また出来事文における処格選択、出来事の意味生起のメカニズムなどの問題を明らかにしたい。

### 3. 「が」格名詞の意味情報

本稿は「が」格名詞の意味情報を意味タイプとクオリア構造の二つの面から捉える。

#### 3.1 「が」格名詞の意味タイプ

影山 (2011) は日本語で日常よく使われる相対する概念「もの」と「こと」を基準に、日本語の名詞を「モノ名詞」と「デキゴト名詞」の二種類に分けた。

9) a. モノ名詞

アイスクリーム、机、リンゴ、先生、ニワトリ、水、空、夢

(場所名詞) 会議室、運動場、台所、郵便局、居間、自転車置き場

## b. デキゴト名詞

会議、運動会、オリンピック、試合、コンサート、事故、地震、爆発

影山 (2011 : 39-40)

モノ名詞とデキゴト名詞の基本的な区別は時間的変動性があるかどうかということである。例えば9 b) の「会議」は「昨日の会議」「三時間の会議」のように、時間的な修飾語をつけることができるが、9 a) の「アイスクリーム」は「?昨日のアイスクリーム」「\*三時間のアイスクリーム」のように、時間的な修飾語がつくと、昨日買ったアイスクリームなのか昨日売ったアイスクリームなのか、文脈による意味の補充が必要になる。

日本語の存在文は目の前の状態を記述するもので、基本的にモノ名詞が使われており、時間的変動性がほとんど示されていない文である。それに対して、出来事文はある時間に発生する／した事象を表すもので、デキゴト名詞が「今日」「一年前」「冬休み明け」などの時間副詞で修飾されるものが多い。

## 10) 存在文

- a. 部屋には、五つのテーブルと丸椅子があり、それぞれ真新しい名札がつけてあった。(『生きる』)
- b. そこには、いつ、何処で働いていたかの記録がある。(『借金国の経済学』)
- c. その中に「憲法を改正し、独立国家としての体制を整備する」とのスローガンがあります。(『実録六〇年安保闘争』)

## 11) 出来事文

- a. きょうもね、町長さんのところでは、お昼に宴会があるんですよ。(『自立』)
- b. 一年前、社内で連続放火未遂事件があった。(『活字狂想曲』)
- c. 冬休み明けに中学校でテストがありました。(Yahoo! 知恵袋)
- d. 栃木地方などでみられたというが、「初あるき」という行事がある。

(『岩波講座教育の方法』)

本稿は中納言を利用し、『現代日本語書き言葉均衡コーパス-通常版(BCCWJ-NT)』から動詞「ある」が含まれる例文を抽出した。具体的には、文字列検索において、正規表現「があ[りるれろっ]」で検索をかけ、例文を抽出し、また抽出された例文から出来事を表すものを選び出した。これらの出来事文に現れる名詞を以下の12) に示す。

- 12) 会議、展示会、地震、火事、火災、接待、フラメンコ、セレモニー、宴会、浴衣会、電話、指示、知らせ、手紙、メール、ファックス、通達、通報、連絡、仕事、弾圧、テスト、事件、事故、

救い、救助、発表、会合、選挙、空爆、試験、結婚式、行事、天気予報、講演会、プレゼントの交換、授業、卒業式、見物、論争、活動、イベント、商売、集会、試験、声明、報い、抵抗、批判、反発、非難、説明、返事、疑い、相談、話、客、来客…

上記の名詞は基本的に時間的な修飾語をつけることができるため、デキゴト名詞の特性を持っている。

13) 昨日の [会議、展示会、地震、火事、テスト、フラメンコ、集会、授業、救助、発表、会合、選挙、空爆、試験、結婚式、行事、天気予報、講演会、プレゼントの交換、卒業式、見物、相談、話、来客…]

三時間の [会議、展示会、地震、火事、テスト、フラメンコ、集会、授業、救助、発表、会合、選挙、空爆、試験、結婚式、行事、天気予報、講演会、プレゼントの交換、卒業式、見物、相談、話、来客…]

しかし、12) の中にモノ名詞であるもの（「手紙」、「メール」、「ファックス」、「客」など）も入っているが、これらの名詞には時間的な変動性を持っているため、出来事文にも許容されているのである。

14) a. このフォルダにはメールがありません。 (Yahoo! 知恵袋)  
b. 落札者の方から落札後すぐメールがありました。 (Yahoo! 知恵袋)

15) a. 玄関には、見慣れぬ下駄や靴がある。四五人、女の客があるようだ。  
(『ストックホルムの密使』)  
b. そのとき、客があった。「ああ、ようおいで。」芳太郎はことさら声を張りあげた。  
(『新十津川物語』)

14 a) と15 a) は存在文であるのに対して、14 b) と15 b) は出来事文である。同じ名詞でありながら、二つの意味特性を持つのは、意味タイプの違いではなく、語彙項目の各側面を説明するクオリア構造における違いであると考えられる。次節ではクオリア構造の概念を導入し、「が」格名詞のクオリア構造を考察する。

### 3.2 「が」格名詞のクオリア構造

クオリア構造 (Qualia Structure) は語彙への理解と推論のシステムを表すもので、従来の語彙意味論やレキシコン理論には見られない、生成語彙論 (Generative Lexical Theory)<sup>5</sup> の一つの大きな特徴である。クオリア構造には、構成クオリア (CONST)、形式クオリア (FORMAL)、目的クオリア

ア (TELIC)、主体クオリア (A GENTIVE) との4つのタイプが含まれる。

16) クオリア構造

- a. 構成クオリア (C onstitutive Qualia=CONST)  
物体とそれを構成する部分の関係
- b. 形式クオリア (Formal Qualia=FORMAL)  
物体を他の物体から識別する関係
- c. 目的クオリア (Telic Qualia=TELIC)  
物体の目的と機能
- d. 主体クオリア (Agentive Qualia=AGENTIVE)  
物体の起源や発生に関する要因

(Pustejovsky1995 : 76、小野2005 : 24を参照)

「電話」の例で説明すると、17) になる。

17) 「電話」のクオリア

QUALIA=FORMAL=apparatus

TELIC =convey message

特定の文脈の中に、クオリア構造の4つのタイプがすべて出現するのではなく、名詞の意味タイプによって選択されることになる。例えば前述の7 a) の「机の上に電話があった」場合は、「電話」はモノ名詞であるので、形式クオリアのほうが選択されるのに対して、7 b) の「彼女から電話があった」場合は、「電話」はデキゴト名詞の特性を持つので、目的クオリアが選択されるのである。

「ある」構文に関して、モノ名詞とデキゴト名詞のクオリア構造における意味的な違いは18) に示される。

18)	_____	a. モノ名詞	_____	b. デキゴト名詞
	形式クオリア	もの (x)		出来事 (y)
	構成クオリア	x の構成材料		y の構成概念
	目的クオリア	x の存在の目的		y の発生の目的
	主体クオリア	x が場所 (z) に存在する		y が場所 (w) で発生する

(影山2011 : 43を改変)

18) から分かるように、モノ名詞とデキゴト名詞のクオリア構造における違いは4つの面から捉えられる。即ち、形式クオリアの面においてものか出来事か、構成クオリアの面においてどんなも

のから構成されるか、目的クオリアの面において何の目的にあるか、主体クオリアにおいて存在か発生かによって意味が大きく変わってくる。

ここで14) と15) の「メール」と「客」の例で説明する。

19) 「メール」のクオリア

QUALIA=FORMAL=text  
TELIC =convey message

20) 「客」のクオリア

QUALIA=FORMAL=human  
TELIC =visit

形式クオリアから見ると、「メール」は text (文章)、「客」は human (人) で、両方ともモノ名詞になるが、目的クオリアにおいて、「メール」は convey message (情報の伝達)、「客」は visit (訪問) という事象が含まれ、デキゴト名詞の特性が入っている。名詞のクオリア構造に含まれるこのような事象の概念が、出来事文の処格選択に影響を与えることを次の4節で討論する。

#### 4. 出来事文の処格選択

処格 (locative case) とは、もともとは「印欧祖語にあったと推定される文法格の一つで、場所や位置関係を表す。現代英語では場所を表す前置詞句が用いられる」(中野ほか2015:256)ものだが、現代日本語においては、起点格「から」、着点格「に」、方向格「へ」と場所格「で」などが挙げられる。

出来事を表す「ある」構文は、出来事の位置変化が起こるかどうかで二つのタイプに分けられる。一つは出来事の位置変化が起こるもの (21 a) であり、もう一つは出来事の位置変化が起こらないもの (21 b) である。

21) a. 昨日、知人から第一子 (女の子) 誕生の知らせがありました。(Yahoo! 知恵袋)

b. 今日は七里ヶ浜のプリンスホテルで昼食と展示会がある。

(『ターキーの気まぐれ日記』)

中右 (1994 ; 1998) では21 a) のように位置変化が起こる「ある」文を「過程述語」文と呼ばれている。本稿はそれを参考に、21 a) のような出来事の位置変化が起こるものを「出来事文の過程 (process) 用法」と呼ぶことにする。それと区別して、21 b) のような出来事の位置変化が起こらないものを「出来事文の活動 (activity) 用法」と名づける。コーパスの実例から、この二つのタイプは異なる処格を持つことが観察された。過程用法の場合は、過程述語に特有の起点格 (から)、着点格 (に)、方向格 (へ)、対象格 (に) のいずれかの一つ、或いは二つ以上と共起している。



- 22) a. 翌日の午後、有美子から電話があった。 (『見えない宝石』)  
 b. さっき俺の携帯にに電話があった。 (『封印された手紙』)  
 c. 最近私のところへこういう電話があった。 (『英語の学び方』)  
 d. その頃より、ときどき父にに女性から電話があつて、昼寝ている父が出かけることがあつた。  
 (『思春期・こころの病』)  
 e. ふと彼女のことを考えていたら、そのサンドラから自宅に電話があつた。  
 (『泣くな！海外駐在課長』)

22 a) は起点格 (から)、22 b) は着点格 (に)、22 c) は方向格 (へ)、22 d) は対象格 (に) と共起する例で、22 e) は起点格 (から) と着点格 (に) が共に現れる例である。

一方、活動用法の場合は、よく場所格 (で) と共起するが、それを省略する場合もある。

- 23) a. その日、午後1時ごろから、所沢で遠征前の練習があつたんです。  
 (『プロ野球殺られても書かずにいられない』)  
 b. その山すその竹藪で、今年の春、火事があつました。 (『回文ことば遊び辞典』)  
 c. 週三回、練習がある。 (『横浜中華街』)  
 d. 工場の火事があつたのはその翌年だから。 (『宇宙神の不思議』)

23 a, b) は場所格 (で) と共起する例であり、23 c, d) は共に場所格が省略する例であるが、23 d) の「火事」の連体修飾語からその場所が「工場」であると読み取ることができる。

22) と23) の例文から分かるように、過程用法の出来事文では、処格が少なくとも一つ以上必要であるのに対して、活動用法の出来事文においては、処格がよく省略される。また、この二種類の出来事文には、もう一つの違いがある。それは過程用法と活動用法が混用されないという点である。

- 24) a. 彼女から電話があつた。  
 b. \*彼女からこちらで電話があつた。  
 25) a. こちらで会議があつた。  
 b. \*彼女からこちらで会議があつた。

24) と25) から分かるように、起点格「から」と場所格「で」が一つの出来事文に共に現れることができない。それはこの二種類の出来事文に現れる名詞によって決められるためだと考えられる。

以下の表1から分かるように、過程用法に用いられる名詞は「ある」との共起関係で、「出来事性」のほかに、位置変化に必要な「移動性」も持っているという特徴がある。その「移動性」に対応して、起点格、着点格、方向格、対象格のいずれか或いはセットで選択されるのである。それに対し

て、活動用法に用いられる名詞は「ある」と共起しても、位置変化がないため、それに伴う「移動性」も生じず、その結果「出来事性」しか持たないことになり、出来事の場所を表す「で」格と共起するのが普通である。

表1 出来事文に用いられる名詞

A. 過程用法	電話、指示、知らせ、手紙、メール、ファックス、通達、通報、連絡、声明、非難、説明、返事、疑い、相談、話、うわさ、客、来客報い、抵抗、批判、反発、弾圧、救い、救助、…
B. 活動用法	会議、展示会、地震、火事、火災、接待、フラメンコ、セレモニー、宴会、浴衣会、仕事、テスト、事件、事故、発表、会合、選挙、空爆、試験、結婚式、行事、天気予報、講演会、プレゼントの交換、授業、卒業式、見物、論争、活動、イベント、商売、集会…

### 5. 出来事の意味生起のメカニズム

日本語の「ある」は、もともと「存在動詞」として捉えられてきた（金水2006、西山2004；2013など）が、どういうはたらきで出来事の意味が生じてくるのかは興味深い課題である。言語学の伝統的な考え方では「文のかなめは動詞であり、動詞の意味構造が主語や補語などの現れ方を決定する」（影山2011：43）ようであるが、26) では、同じ「所有」の意味構造を持つ「ある」で、26 a) は適格で、26 b) は不適格になる。そして26 b) の「に」格がなくなると、自然な文になる（26 c)）。このことから動詞の意味構造だけで文の意味を決定するのではないことが分かった。

- 26) a. 私にはいい考えがある。
- b. \*私には難しかった記憶がある。
- c. 私は難しかった記憶がある。

その一方、小野（2005）は多義発生の要因の一つとしてクオリア構造統合（qualia unification）であるとしている。つまり、クオリアの不完全指定部分に他の語彙概念のクオリアを補うことによって意味を生成するのである（小野2005：63）。それと同じような考えで、影山（2011）ではデキゴト名詞のクオリア構造に記載された情報が、動詞の意味的性質と場所句の格表示に影響していると述べられている（影山2011：43）。

以下は小野（2005）と影山（2011）を踏まえ、「学校がある」「会社がある」のような、モノ名詞を使いながら多義性が生じる構文において、静的な存在状態からいかに動的な出来事の意味が生起するのかを考察していく。

日本語の「学校がある」は、場所の存在（27 a）を表す場合と授業があるという出来事（27 b）を表す場合がある。

- 27) a. トンネルの手前に学校があります。[存在]  
 b. 明日は学校があります。 [出来事]

それは、「学校」という語に「空間的な存在場所（教育機関）」と「その場所で行われる教育活動」との二つの意味があると考えられるからである。この二つの意味はクオリア構造によって表示されると、28) になる。

## 28) 学校

QUALIA=FORMAL= institution (entity)

TELIC = educate students (event)

つまり、「学校」の形式クオリアはモノ名詞として記載されているが、目的クオリアの面では、デキゴト名詞の意味情報が入っている。一方、動詞「ある」のクオリア構造には<存在>の属性のみ記載されていないと考えられる。その場合は、存在物 (x) と存在場所 (y) の二つの項が指定されている。

## 29) ある

QUALIA=FORMAL=exist (x, y)

x はモノ名詞が要求されるのが原則である。30) のような文では、「学校」の形式クオリア「institution (entity)」がモノ名詞であるため、x に来ることができ、また存在の場所としての y (「に」格名詞) も必要になってくる。言い換えれば、「学校」の形式クオリアが「ある」の意味情報とマッチ (match) し、この場合の「学校がある」は<存在>を意味することになる。

## 30) トンネルの手前に学校があります。

QUALIA=FORMAL=exist (学校, トンネルの手前)

それに対して、31) の場合は、「ある」構文に「明日」「木曜日」「毎日」「平日」「普段」などの時間副詞が補語に来ることが普通である<sup>6</sup>。時間的修飾語が必要になるのがデキゴト名詞の特性なので、それが「学校」の目的クオリア「educate students (event)」を取り立て、さらに「ある」の意味情報に読み込まれることになり、この場合の「学校がある」は<出来事>を意味することとなる。

## 31) 明日は学校があります。

QUALIA=TELIC=educate students (event)

上述の考察をまとめると、「ある」構文において出来事の意味生起のメカニズムに、「が」格名詞の目的クオリアが肝心であることが分かった。「が」格名詞の意味タイプがモノ名詞であっても、そのクオリア構造にデキゴト名詞の情報が入っていれば、「ある」構文は出来事の意味が生起しやすい。また、「ある」構文において、デキゴト名詞に必要な時間的修飾語が現れる場合は、その意味情報が「が」格名詞の目的クオリア (event) を取り立てることによって、「ある」構文は静的な存在から動的な出来事へと、意味の拡張が行われたと考えられる。

## 6. まとめ

日本語の存在表現「ある」構文が、なぜ出来事を表すことができるのかという点については、言語学研究ではまだ未解明の課題であった。本稿は「ある」構文の一側面としての出来事文の意味的・統語的特徴を考察した上で、存在文から出来事文への意味生起のメカニズムを探ったものである。本稿の考察を通して、次の結論が得られた。

- ① 出来事文の「が」格名詞は時間的な変動性を持っており、意味タイプとクオリア構造によって「ある」構文の意味特性が決定される。
- ② 出来事文には過程用法と活動用法の二種類あり、過程用法は「出来事性」のほか、「移動性」も持っており、起点格、着点格、方向格、対象格のいずれか或いはセットで処格が選択されるのに対して、活動用法は「出来事性」しか持たず、場所格「で」と共起するのが普通である。
- ③ 出来事文の意味生起のメカニズムとして、「が」格名詞の目的クオリアが肝心であり、また時間的修飾語の意味情報が「が」格名詞の目的クオリアを取り立てることによって、「ある」構文は静的な存在状態から動的な出来事の意味が生起すると考えられる。

日本語の「ある」構文は、存在と出来事以外に、所有と属性を表すこともできる。存在・出来事・所有・属性の四者の間にどんな意味的なつながりがあるのか、存在文から所有文・属性文への多義発生メカニズムも「が」格名詞と関わっているかなどについては、今後の課題としたい。

## 注

- 1 モノ名詞とデキゴト名詞は影山 (2011) の分類であり、その区別については本稿の3.1で詳述する。また、同じ分類を指しながら、小野 (2005) では固体名詞と事象名詞が使用されているが、本稿は出来事文を説明する便宜上、影山 (2011) の術語を使用することにした。
- 2 名詞のクオリア構造については第3節で詳述する。
- 3 影山 (2011) の「成り立ち」は生成語彙論の中のクオリア構造の主体クオリア (Agentive Qualia) に当るものである。
- 4 本稿に用いられる用例はすべて国立国語研究所が開発した『日本語書き言葉均衡コーパス—通常版 (BCCWJ-NT)』より抽出したものである。
- 5 生成語彙論 (Generative Lexical Theory) は、アメリカの言語学者 Pustejovsky 教授によって提唱された語彙意味論の一つで、語彙の生成的な側面や語の創造的な使用に着目し、語の多義性を動的な合成プロセスの所産としてとらえる点が特徴であり、従来の静的語彙分析理論より詳細な意味操作と意味記述の仕組みを持っている。意味記述の面は3つのレベルからなっており、クオリア構造 (Qualia Structure) 以外に、項構

造 (Argument Structure) と事象構造 (Event Structure) が設けられている。詳しくは (Pustejovsky1995)、小野 (2005; 2008)、影山 (2005) を参照されたい。

- 6 出来事を表す「学校がある」場合は、「ある」構文に「明日」「木曜日」「毎日」「平日」「普段」などの時間副詞が補語に来なくても、「学校がある時/日に」のように、出来事に必要な時間的修飾語が文に現れるのが普通である。

## 参考文献

- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*. MIT Press
- 小野尚之 (2005) 『生成語彙意味論』くろしお出版
- 小野尚之 (2008) 「クオリア構造入門」影山太郎編『レキシコンフォーラム No. 4』ひつじ書房 pp. 265-290
- 影山太郎 (2005) 「辞書の知識と語用論的知識—語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけて」影山太郎編『レキシコンフォーラム No. 1』ひつじ書房 pp. 65-95
- 影山太郎 (2011) 「モノ名詞とデキゴト名詞」影山太郎編『日英対照 名詞の意味と構文』大修館書店 pp. 36-60
- 岸本秀樹 (2003) 「「ある」「いる」の交替現象—存在・所有の概念と文法形式」月刊言語 (11) p. 45-51
- 岸本秀樹 (2005) 「存在・所有構文」『統語構造と文法関係』くろしお出版 pp. 155-215
- 金水敏 (2006) 『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房
- 定延利之 (2004) 「モノの場所を表す「で」?」『日本語の分析と言語類型—柴谷方良教授還暦記念論文集』くろしお出版 pp. 181-198
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析—生成文法の方法』大修館書店
- 中右実 (1994) 『認知意味論の原理』大修館書店
- 中右実 (1998) 「空間と存在の構図」中右実・西村義樹編『構文と事象構造』研究社 pp. 2-106
- 中野弘三・服部義弘・小野隆啓・西原哲雄 (2015) 『(最新) 英語学・言語学用語辞典』開拓社 pp. 256
- 西山佑司 (2004) 「名詞句の解釈と存在文の意味」『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句』ひつじ書房 pp. 393-424
- 西山佑司 (2013) 「存在文と名詞句の解釈」『名詞句の世界—その意味と解釈の神秘に迫る』ひつじ書房 pp. 243-328

## 付記

本稿は2014年度(中国)“国家社会科学基金青年項目”研究助成費(課題番号14CYY025)及び2014年度(中国)“湖南省哲学社会科学基金一般項目”研究助成費(課題番号14YBA081)及び2015年度日本国際交流基金日本研究フェローシップ助成金による研究成果の一部である。